

情報処理をめぐる

金沢大学長 岡田 晃

私の研究分野は、衛生統計という言葉が示すように医学のなかでも数学を取扱うことが身近な領域でした。いわゆる医学博士にかかわる論文は昭和33年に発表していますが、少数例を対象としたため分散分析を応用して有意性を検討しました。データのまとめでt・F検定などもほとんど行われていなかった時期であっただけに少数例の統計処理をしたのは早い方でしたが、もともと数学に弱いため医学部を志望しただけにその時の苦勞が想い出されます。昭和30年、衛生学教室へ入ったときはタイガー計算機の全盛時代、大切に保管されていたモノローの計算機は大変な貴重品、ボタンを押して計算するので時間も早く、疲れも少いので調査されました。昭和38年から公衆衛生水準を客観的に評価するため、さまざまな健康指導の相関行列に因子分析を行い、3つの因子を抽出し、各変数の重みと規格化された測定値の1次結合として公衆衛生水準推定値を算出し、市町村別、保健所別に得点を比較することを試み、その成果を昭和40年に公表しました。最も早く、因子分析法を医学領域で応用したものとされましたが、この時にはタイガー計算機を使ったので時間もかかり、頻繁な計算のし直しがありました。電子計算機はその後使用し、昭和43年には「医学のあゆみ」の依頼原稿で、「公衆衛生研究における電子計算機の利用」という総説を発表しましたし、翌年には雑誌「公衆衛生」にこれも依頼原稿であったが、「コンピュータで活用される公衆衛生活動の技法」が掲載され、これは昭和45年の「公衆衛生活動におけるシステムズ」につながってゆきます。この頃、保健所になぜコンピュータを導入しなければならぬかが問題となり、議論の対象となったものです。研究活動とのかかわりはこれ位にして金沢大学へ赴任したのは昭和47年、当時は計算機センターがあり、たしか昭和50年過ぎか小堀センター長の時代に運営委員として医学部から参加しておりました。その頃のことで今も覚えていることは富士通かそれ以外のシステムにするかで激しい議論があり、投票の結果1票差で決まったことです。その計算機センターもやがて情報処理センターになり、さらに総合情報処理センターとなって、先人の多大な努力によって発展してきました。センターの計算機システムを整備運用して情報処理を効率的に行うとともに学術ネットワークの整備運用も主な目的としているこのセンターも予定として平成6年度には角間に移ることが計画されており、さらに大きく発展する時期を迎えているといえましょう。言うまでもなく革新的な演算、通信、制御の技術の展開により人間生活は大きな影響を受けました。これは環境保全センター長からお聞きしたことです。情報処理の情報を日本語に訳したのは森 鷗外だそうで、「情けの報せ」という意味でこの二字をあてたということです。テイラーが科学的管理を唱えた時代には、それに反発して機械打ちこわし運動があったそうです。しかしコンピュータの普及に際して、コンピュータウイルスがやがて250

0種にまで及び、コンピュータワクチンでウイルスを駆除することに当面しているとはいえ、不思議に打ちこわし運動は起こりませんでした。案外これからはいろいろな意味で情けとか情熱などをいかに導入するかが課題となるかもしれません。この機会に多くの関係者の御苦勞を謝し、さらなる大きな躍進を心から期待いたします。